

メタ世界より

漆原正雄

すべてが聞いたことのないことばかりで
ぼくの発熱を深めていない

想像に過ぎないが

まばたきをする魚がいればきつと笑うだろう
方角を読み取れるかもしれない

ぼくは過去を溶かしはじめた

そして左の頬の星座が

白昼の眠気が

注釈つきの花卉の向こうに逃げ込んでいく

倫理の網で捕獲された構文

平たい顔の前で光る符号

吐く息に（それは生きていた）

と言えるだろうか？

一章ごとに水滴をふるい落とし石を積む

まるで夜会の奴隷！

おぞましい鳥の皮がすべてのものものど
に住みつく

すべてのものものどに

ものものどに

〈産卵を避ける〉

と言えるだろうか？

だから

すべてが聞いたことのないことばかりで
だから

星座の背後で水滴をふるい落とす者たち！
罪のない石を積み上げる罪人よ！

弦楽五重奏男がぼくをひやかしにやって来る
無料宿泊券をばらまく街角の老人がぼくの

この平たい顔を削ろうとしている

(ますますのっぺらぼうになるじゃないか)

かすかな仮称の声を追い求め

たそがれながらも分かち合えるもの――

もののものど

そのものものどを

のどのものどを

ぼくの喉！ ぼくの声！

すでに銃声を見失っているというのに！

書熱の中で

漆原正雄

マネキンの橋を渡ったあとで

僕はすでに何もかもがつくりものだ気づく

ついこの間の情景が言葉着をはおり

洞穴の紙の抽出が遅れているにもかかわらず

もうしゃべる者が一人もない

——曆など腐る前に破り捨ててしまえ！

願うことさえなかった貧しい焦土と

もつとも不愉快な伝統的な方法

まぶたの証明を置き去りにして

星の礫が目痛い

光る魚の群れが巨大な船の作画を拒んでいる

僕は君を二十五時の川辺のどこかに隠した

(本当だ、もう、亡霊なんだ)

だから君は凍えるように

愛するように体をこわらせながら

君の

その胸の籠から

無数の文鳥を待ち受けている

(の亡霊としての亡霊としての亡霊……)

書熱の中で

あたかも親しいようにしゃべりつづけた
のを覚えているか？

人を指差す者の消えたにおい

橋を吹き飛ばす橋嫌いのマネキンたち

あるいは川辺の美しい獣たち

キャラメルジェラシー工場跡地で

僕たちの眼鏡がきらきら輝いている！

共通点はただ一つ——パンツ！ 弾ける！

あのときの情景は

この言葉着に刺繍したほうがいいだろうか？
手帳型のノートで充分だろうか？

〈ハイテンション・ポエム〉と

じゃあ、先に行くよ——パンツ！

有限のメモ

漆原正雄

振り向け、と、振り向くな、の、
その間を軽やかに吹き抜ける風に憧れる。

月の竜宮に行きつくことはできるだろうか？

この燃えさかる日々を捨てて。

無言の絶壁をのぼる愛は、

もうとつくに失われたというのに！

この知性は進化を覚えない。

いや、そもそも、ぼくに知性などないのだ。

あるのは、個、

れんめんと引き継がれた、個。

(しかしぼくは何も持たず、

持たないふりをして、

ポケットに手をつ突っ込んだ。)

削り取れるところはすべて削り取って、

あの名前だけを返してくれ。

あの慰めの道を、あの慰めの森を……

どうか、人のごまかしとはそんなものだ、

公然と世界を包括しないでくれ。

夜は眠らない。なぜなら夜は夜でありつづ
けなければならぬから。しかし夜の眠り
は昼に訪れるのかといえれば必ずしもそうで

はない。朝は怠惰だ。世界の仕事に勤勉なのは、熱心なのは、夜のほうなのだ。

荒れた庭でぼくは手紙を破り捨てる。

(遙か夏熊に会いに行け！)

ぼくは地下の植物の呼気を聞く。

(遙か夏熊に会いに行け！)

ぼくは全裸で今日の産卵数をかぞえる。

(遙か夏熊に会いに行け！)

ぼくは鳥の羽根で歯を磨く。

(無残にも過去を持たない舌が燃える。)

ぼくは水の輪にやさしく抱かれない。

(しかしどちらも黄ばんで退化している。)

「何か」を伝えそうなもう一つの「何か」が喉に引っかかって、ぼくはせつない。

(日常は一元化を起こす前に乾く。)